

#001

リアス式海岸と島々の造形美 伊勢志摩の穏やかな絶景をもとめて

サミット開催地の伊勢志摩
美しい景色をこの目で見たい

澄みわたる青空と色づく紅葉。心地いい秋晴れの日を迎えると、ふらっと遠くに旅したくなる。どこに出かけようか。思いを巡らせたときに浮かんだのは、伊勢志摩サミットの開催地に選ばれた賢島（かしこじま）の上空からの景色。こんな美しい島があるとは知らなかった。

志摩半島南部の英虞湾（あごわん）に浮かぶ周囲7・3キロの島は、賢島大橋と賢島橋で本土と結ばれている。2本の橋以外に島に渡る手段がなく、警備のしやすい点が評価された。大小の島々や複雑な造形美を描くリアス式海岸の絶景、周辺に浮かぶ真珠の筏……。想像は膨らみ、日本の原風景が目前に広がった。

また伊勢志摩といえば、平成25年の式年遷宮で注目される伊勢神宮がある。江戸時代には「一生に一度はお伊勢参り」と言われ、日本人の心の故郷として親しまれてきた。「お伊勢さん」でお参りをし、さらに秘境の地である熊野古道まで足を延ばして2大パワースポットを巡る。海と山の美しい自然、その景色にそびえる壮大なPC橋を訪ね歩き、新たな気持ちで平成28年を迎えよう！期待に胸を弾ませながら早速、旅支度を始めた。

(C) 伊勢志摩観光コンベンション機構



紀勢道

Kisei Road

熊野古道・伊勢路に沿って 悠大にそびえる数々のPC橋

まずは熊野古道の伊勢路を目指した。紀伊半島の南端に位置する熊野は、古くから霊地として崇められ、神話の時代から神々が鎮座する聖地。国生み神話で知られる伊弉冉尊（いざなみのみこと）を祀った地ということから死者が宿る場所、黄泉の国（冥土）と言われるようになった。

熊野信仰の中心となったのは熊野本宮大社、熊野速玉（はやたま）大社、熊野那智大社の3社。それぞれが独立した存在だったが、やがて一体化し、熊野三山、熊野三所権現（くまのさんしょごんげん）と称され、人々は熊野に霊的世界を求めるようになった。貴族や武士から庶民まで幅広い信仰を集め、「蟻の熊野詣」といわれるほど参詣者が訪れたそう。

熊野古道には紀伊路と伊勢路、大峯奥駈道の3つのルートがある。なかでも伊勢路は伊勢神宮を起点に熊野までを結ぶ約170キロの道のりで、伊勢神宮に参拝する多くの旅人が利用した。この2大聖地をつなぐ伊勢路に沿うように造られた熊野尾鷲道路（熊野大泊IC―海山IC）と紀勢自動車道（海山IC―勢和多気JCT）は、平成25年に全線が開通。高速ネットワークを形成し、地域の生活文化や産業経済の新興に寄与している。このルート

を熊野から伊勢に向かって走り、秋のドライブを楽しむことにした。

2つの道路を結ぶ海山IC付近には馬越（まごせ）トンネルがある。馬越峠は、ヒノキ林と自然石が敷き詰められた石畳や丸山千枚田という棚田風景が美しく広がり、伊勢路の中でも特に人気が高い。稲穂が黄金色に輝く原風景を想像しながら走っていくと始神（はじかみ）高架橋が見えてきた。国道42号線とJR紀伊本線をまたぐラーメン箱桁橋で、国道上の張り出し架設は、交通規制を行わずに施工したそう。平成25年に完成した新しい橋は全長303メートル。山々を一直線に貫く堂々としたフォルムが印象的だ。

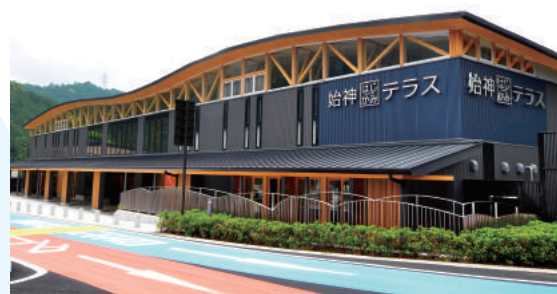
10以上の峠が連なる伊勢路だけあって、目の前には新たな峠が。そして「始神テラス」という看板を掲げたおしゃれな建物を発見した。「そうか、始神峠だ」と思いながら車を停め、館内に足を運んでみた。

平成27年6月にオープンした紀野町パーキングエリアは、ヒノキの心地いい香りで満ちている。魚介や野菜などの特産物を販売し、レストランでは地元の新鮮な魚介を使った数々のメニューを提供していた。お昼には早かったので後ろ髪を引かれながらも出発。オマワキ川橋、古里高架橋、加田高架橋と高い耐震性で紀勢自動車道を力強く守る数々のラーメン橋を通り、伊勢へと向かった。



◀ 五十鈴川に架かる宇治橋も20年に一度の式年遷宮で架け替えられる

▼ ヒノキでつくられたおしゃれな外観が印象的な始神テラス



伊勢神宮の式年遷宮で 建築技術を伝承する宇治橋

伊勢自動車道の伊勢西ICを降りて2キロほど走ると、昔ながらの商家が建ち並ぶ風情漂う界限にたどり着いた。あの有名な伊勢神宮だ。とにかく広くて、お祭りのように人で賑わっている。伊勢神宮は、天照大神を祀る内宮と豊受大御神（とよけおおみかみ）を祀る外宮を中心とした125社で成り立ち、敷地面積は5500ヘクタール。伊勢市の4分の1の面積を占める。

「一生に一度は伊勢参り」という風習が定着したのは江戸時代。短期間に大量の参詣者が押し寄せる「おかげ参り」や奉公人や子どもが主人や親の許可を得ずに伊勢へ向かう「抜け参り」が流行した。参詣者は年々増え、平成25年の式年遷宮でさらに人気が高まっている。

式年遷宮は持統天皇4（690）年に第一回が行われて以来、戦国時代に一時中断したもの、約1300年間に亘って続く。20年に一度、神殿をはじめとする建物のすべてを新造し、御装束や神宝を新調して神様を新宮にお遷しする壮大な神事だ。今回の第62回の式年遷宮は、平成17年から諸祭が行われた。

特に注目したいのは、宇治橋渡始式（うじばしわたりはじめしき）だ。まずは宇治橋の架け替え工事を行

い、渡始式が終わると神宮内の建物の建て替えが始まるそうだ。

内宮への入り口、五十鈴川に架かる全長101・8メートルの宇治橋は、日常の世界から神聖な世界への架け橋といわれ、その手前には高さ7・5メートルのヒノキ造りの大鳥居がそびえ立つ。ここで参詣者は一礼をして宇治橋を渡り、内宮へと足を進める。

純日本風反り橋の宇治橋は、高欄部は30坪の木造住宅16軒分の木曾ヒノキを、橋脚にはケヤキを使用する。部材は、原寸どおりの図面を薄い板に写し、その板を用材にあてながら木取りの墨を入れる「原寸型取り」という伝統手法を用いるなど、昔からの技法で建築される。そうやって1300年もの間、技術伝承されているのは、とても興味深く、価値のあることだと思った。

内宮での参拝を終えてから、五十鈴川に沿って老舗店やお土産店、飲食店が約800メートル続く「おはらい町」でランチタイム。カツオの切り身を醤油だれに漬け込み、寿司飯にのせた伊勢名物「手こね寿司」はシンプルな美味しさで、あつという間に完食した。お腹に余裕があったので赤福本店で出来立ての赤福餅をいただく。お座敷に座り、夕暮れに染まる山の紅葉と五十鈴川を望み、ゆったりとした時間を過ごした。



◀ カツオ漁の漁師が手軽に食べられる食事として作られた「手こね寿司」



▲ 赤福餅は伊勢神宮神域を流れる五十鈴川の清流をかたどったもの



▲ 伊勢神宮の内宮への入り口にそびえるヒノキ造りの宇治橋大鳥居

◀ 江戸から明治時代の伊勢路の町並みや風情を再現した「おはらい町」

主桁と橋脚が一体構造 壮大なフォルムの磯部大橋

昨日は志摩市の的矢湾の高台にあるホテルに泊まった。朝日を感じて窓際に近づくと山々の緑と青い海、赤い橋のコントラストが美しい景色が広がっている。とても気持ちいい目覚めを迎えた。

いよいよ今日は絶景を求めて英虞湾を目指す。その前にホテルの近くにある磯部大橋に向かった。

平成7年に開通した国道167号線に架かる橋は、清流・池田川の上流にあり、全長413メートル。1970年代の車社会到来による磯部町追分から穴川付近の渋滞を解消するために造られた。山間にそびえる壮大な橋はすぐに見つかる。けれども、どうやって橋脚まで降りたらいいのか。橋の撮影には毎回苦労する。カーナビにも表示されない道なき道をぐるぐると巡ること約20分。ようやく清流の流れる橋脚のたもとにたどり着いた。

磯部大橋は、紀勢自動車道を支える数々の橋と同じラーメン橋。ラーメンとは「骨組み」を意味するドイツ語のrahmenに由来する。主桁と橋脚の間にゴムなどの支承を設け、収縮や回転を吸収する連続桁橋に對し、ラーメン橋は主桁と橋脚が一体構造。PC技術を駆使した橋は、耐震性

が高く、コストを抑えられるメリットがある。橋を見上げると青空に流れる白い雲を背景に、どっしりとそびえるシンプルなフォルムがよく映えていた。車が通るたびに聞こえてくるカタン、カタンと響く音を聞く心が癒され、さっきまでの不安と苦勞を忘れていた。

美しい英虞湾の特等席 横山展望台からの眺望に感動

英虞湾は志摩半島で一番大きな入海。リアス式海岸の特徴を持ち、賢島をはじめとする大小さまざまな島が点在する真珠の養殖でも有名なエリアだ。英虞湾の景色なら横山展望台がトップクラスと聞いていた。

志摩半島南部にある横山展望台は、標高203メートルの横山に設置されている。駐車場から展望台までは散歩道が整備されているため、年配の観光客も多い。しかし、思ったよりも距離があり、階段を登ってようやく汗ばんできた。それでも展望台が見えてきたら自然と駆け足になる。手摺りをしっかりとつかみ、身を乗り出して目の前に広がる景色を右から左、上から下へと隅々まで眺めた。無数の島々と複雑に入り組んだ英虞湾。美しく穏やかな海に浮かぶ真珠筏が風情を誘う。真珠王の御木本幸吉も横山登山を楽しんだそう

だが、この景色を望みながら、自らの人生を振り返ったのかもしれない。

奥志摩のランドマーク 自然と調和した志摩丸山橋

賢島に行く前に、志摩丸山橋に立ち寄ろうと思った。日本の道百選に選ばれた志摩半島の最南端の先島半島まで伸びる国道260号線に沿って志摩町を目指す。

志摩丸山橋の全長は318メートル。主要部の2径間斜張橋は橋長228メートル、支間長113・4メートルで、平成元年の完成当時は日本一の支間長を誇っていた。

PC斜張橋は主塔と斜材、主桁で構成される構造。主塔を高くして斜材の配置範囲を広くすることで長支間化が可能で、200メートルを超える橋梁もある。斜材本数を増やすほど桁高を小さくすることができると斜材配置・主塔形状の設計の自由度が高い。この地域が伊勢志摩国立公園内にあることから周辺環境との調和に配慮し、優れた構造特性と美しい外観をあわせ持つPC斜張橋が採用された。

リアス式海岸の入り江を渡す志摩丸山橋の両岸には、作業場と小さな民家が建ち並び、海には真珠筏と漁船が浮かんでいた。ここでも撮影に苦戦。岸を行き来していたら真珠の

山間と清流の中で堂々とそびえる全長413メートルの磯部大橋 ▶

▼ サミットに向けて急ピッチで開発が進められている賢島



志摩丸山橋

Shima-maruyama Bridge

養殖業を40年続ける地元のおじさんに「いい写真が撮れる場所に船で案内するよ」と声をかけられた。

この布施田には200以上の養殖業者がいたが、現在は30軒程度。その大半が年金生活者で、若い人たちは会社勤め。志摩丸山橋が開通してから、伊勢や松阪、鶴方に通動できるようになったそうだ。「この辺りの家は、ほとんどが廃屋だよ」と聞いてびっくりした。

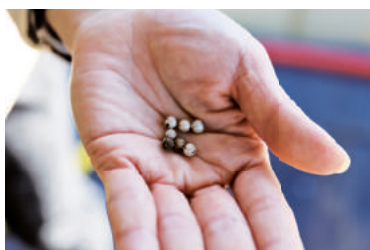
伊勢志摩サミットで盛り上がるなか、伊勢の赤福のようなお土産をつくろうと、志摩では商工会などが中心となり、新鮮な魚介を使ったあられを発売した。おじさんも真珠養殖に使用するアコヤ貝、伊勢志摩特産のアツパ貝、牡蠣の3種フライの料理を考えて、メディアから取材を受けたと嬉しそうに話してくれた。「そう、食べてみる？」と手際よくアコヤ貝を開いた。貝の内側の七色に輝く真珠層から取り出した貝柱は、ほんのり磯の香りがした。「これも雑誌に紹介してね」と小さな真珠を手のひらにのせてくれた。

偶然に出会ったおじさんから伊勢志摩サミットの話を聞き、気持ちが高めながら賢島へ。かつては英虞湾の中で最大の無人島で、昭和初期に「海の軽井沢」をテーマに開発がスタートした。その一貫として建設された「志摩

観光ホテル」は、戦後初の総洋式リゾートホテル。日生劇場（東京都）や世界平和記念聖堂（広島市）などを手がけた昭和を代表する建築家・村野藤吾氏が設計した。昭和44年に再び村野氏の設計で増築された「志摩観光ホテルクラシック」が、サミットの主会場となり、クラシックから300メートル離れた同敷地内に平成20年に開業した「志摩観光ホテルベイスイート」が宿泊施設となる予定だ。

全長150メートルの賢島大橋、そして「志摩観光ホテルクラシック」は、グレーのシートに覆われ、耐震補強や改修工事の最中だった。トラックが頻繁に行き来し、工事現場の方々が車を誘導する。その様子から島全体に満ち溢れる活気を感じた。

車を停めて、真珠筏が浮かぶ英虞湾とホテルを眺めながら、この海を愛し、恩恵を受けてきた人たちの伊勢志摩サミットに寄せる期待に思いを馳せてみた。これを機により多くの人たちに伊勢志摩の魅力を知ってもらい、地域活性化につながってほしい。そんな気持ちでいっぱいになった。



▲ 真珠養殖を40年続けるおじさんからのプレゼント



亀甲橋

Kikkou Bridge

明治時代の風情漂う 名店で松阪牛のすき焼きを

リアス式海岸の美しい海と真珠、伊勢海老に代表される海の幸、伊勢神宮と旅を堪能した2日間。紀勢自動車道から勢和多気JCTで伊勢自動車道へと分岐し、名古屋への帰路に就く途中、大切なことを思い出した。三重県といえば松阪牛。このチャンスに本場の味を体験しなければ：と松阪ICを降りた。

ガイドブックによると、松阪には和田金の「金」と牛銀の「銀」を合わせて松阪牛の金・銀といわれる名店があるとのこと。今回は松阪駅からほど近い「牛銀本店」を目指した。店がある魚町通りは、松阪の木綿商に生まれた本居宣長の旧宅跡や松坂三大豪商の長谷川家の邸宅が点在し、城下町の面影を残す。この地に牛鍋屋として明治35年に創業したのが牛銀だ。明治時代から変わらぬ趣のある和風建築が本店で、その隣が洋食店。平日にも関わらず、20人程が行列をつくっていた。



▲ 霜降り松阪牛の甘さと柔らかさを堪能できるすき焼

そこで、牛銀本店と隣の洋食店の両店に名前を告げて運命に身をゆだねた。結果、牛銀本店から声がかかる。ギシギシと音のする階段を登り、お座敷へ。ここでは仲居さんがテーブルにつき、すき焼をつくってくれた。まずは牛肉を鉄板でさっと焼き、砂糖と醤油だけで味付け。地鶏卵に絡めて食べると、牛肉の甘さが口の中いっぱいに広がった。すぐく肉が柔らかい！ 次は人参と玉ねぎ、春菊、えのきを焼いてもらい、再び牛肉が登場。最後は青ネギと豆腐で。「牛肉は2枚だけ？」と思ったが予想以上にボリュームがあった。

三方向へと延びる天空の道 亀甲橋はまさに神秘の世界

最後にどうしても見たい橋があった。それは松阪ICの2つ先の久居ICから車で15分、津市稲葉町にある青山高原カントリークラブ。敷地内には「天空の道」の異名を持つ亀甲橋がある。

昭和51年に開場したゴルフ場は、重厚で歴史を感じる佇まい。早速、クラブハウスを訪れ、支配人の伊藤さんに挨拶をしてから「亀甲橋は？」と尋ねてみた。「すぐそこに見えますよ」と目線を送った全面ガラス張りの向こうには、池の上に浮かぶ橋があった。その神秘的な美しさと存在感に言葉も出ない。

亀甲橋が造られたのは平成3年。クラブハウスの前に大きな池があるため、プレーヤーがスタートホールに向かうときには池を巡回していた。これを解消するために考えられたのが、世界初の三方向を結ぶ吊床版橋。吊床版橋とは、谷や川の両側に張り渡したPC鋼材を、薄いコンクリートで包み込んで床版とし、その上を直接人や車が通れるようにした橋のこと。中央部の形状が亀甲形の模様のため、亀甲橋と名付けられたこの橋は、その中央部で3方向に分岐している。中央部には橋脚がなく、それぞれの方向に発生する引張力のバランスによって成り立っているとのことだった。



▲ 亀甲橋は三方向からの床版が120度の角度で結ばれている

気に仕上がったそう。施工方法についても画期的な工法だったことがうかがえる。

世界で傑出したコンクリート構造物に与えられるFIP賞、土木学会が橋梁・鋼構造工学に関する優秀な業績に対して授与する極めて名誉ある田中賞を受賞。国内外から視察に訪れる人も多く、「橋脚がない。すごい橋だ」と土木関係者も驚いていたのだという。

実際に橋を渡ってみると若干の揺れを感じた。けれども縦揺れはわずか2センチで横揺れはゼロ。2年前に大きな地震があったとき、びくともしなかったそうだ。

世界初の技術で造られた亀甲橋の美しさ。その感動の余韻に浸りながら東名阪自動車道から伊勢湾岸自動車道を走る。湾岸長島IC近くで木曽川と揖斐川に架かる2つの連なる橋を通過した。この辺りは、宮宿から桑名宿を結ぶ東海道唯一の海路があった場所。2つの橋は、現代版の『七里の渡し』といえる。

たしかこの橋は……知人の顔が思い浮かんだ。「トゥインクル」と呼ばれる木曽川橋と揖斐川橋は、2橋とも橋長1キロメートルを超える長大橋で、各橋を東西2工区に分け、4つのJVで工事が行われた。橋脚付近はPC桁、支間中央部は鋼桁という、世界初

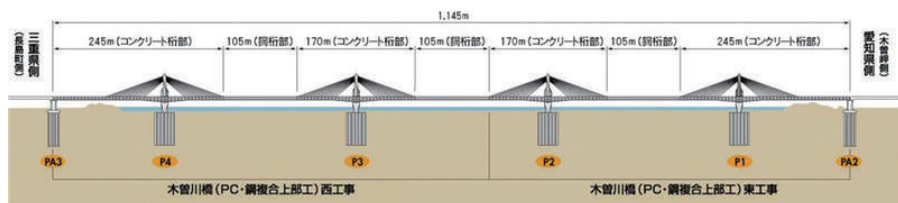


▲ 「トゥインクル」と呼ばれる木曽川橋・揖斐川橋は、世界初のPC・鋼複合連続エクストラードーズ橋(写真は木曽川橋)

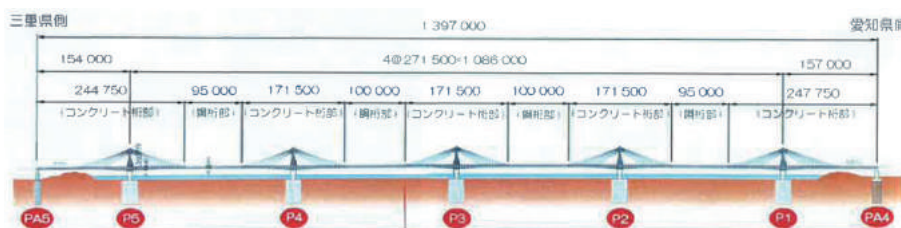
のPC・鋼複合連続エクストラードーズ橋を採用。コンクリートよりも軽量である鋼桁を採用することによって重量が軽減され、エクストラードーズ橋としては世界最長規模の支間長を実現した。プレキャスト・セグメント工法など数々の新しい技術に挑戦したビッグプロジェクトだった。木曽川橋の工事を担当していた知人は、次々

と直面する難題にとっても苦労したと話していたが、最後には大規模な橋をJVで手掛ける体験はとても勉強になったと語っていた。

さまざまな時代や地域、分野で活躍する人たちの「挑戦」や「情熱」を感じた旅。新年の抱負を立てて、前向きにチャレンジしたいとあらためて思った。



▲ 木曽川橋は橋長1145メートル、橋脚と橋脚の間は最長275メートル。この支間の長さは国内でも最大級の規模を誇る



▲ 揖斐川橋は橋長1397メートル、橋脚と橋脚の間は最長271.5メートル

伊勢志摩
“リアス式海岸と島々の造形美”

PC 橋梁 MAP

滋賀県



四日市 JCT

伊勢湾岸自動車道

大阪府



東名阪自動車道

愛知県



伊勢関 JCT

伊勢自動車道



伊勢神宮周辺



奈良県

勢和多気 JCT

伊勢西 IC

伊勢神宮

国道 42 号

紀勢自動車道



海山 IC

加田高架橋

古里高架橋

オマキ川橋

始神高架橋



英虞湾



(C) 伊勢志摩観光コンベンション機構

熊野尾鷲道路

熊野大泊 IC

P4



熊野本宮大社

和歌山県

熊野速玉大社

熊野那智大社

熊野那智大社